



ザ・プセナテラスビーチリゾート
エグゼクティブ アシスタント

新垣 瞳

《終幕は激しいスコール》

サミットの公式行事が終了したと同時に、期間中晴天続きだった空が気にかき曇り我慢していたかのような激しい雨が降りだした。ゲストのお見送りで忙しいロビーの喧騒の中にふとそだけ時間が止まったような錯覚に陥る。路面を叩く雨を眺めながら今年沖縄の二つの暑い夏が終わった気がした。昨年四月の終わりに首脳会合の沖縄開催が決定して以降、その準備に費やした期間が長かったようでもあり、また瞬間のようにも感じられた「終わった」という実感に浸る間もなく私の心の中には、この期間に刻まれた今後の課題が次々浮かび上がる。「沖縄は本格的に「コンベンションビジネス」新時代に向けて今や」とスー

トラインにいたばかり。やるべき事は出来る事から始めなくては。」

《サミットの遺産》

「サミットの遺産は」と人は口々に言う。でも私は今回だけは、何が残されたのかではなくて、何を残すべきなのかと遺産を捉えなければならぬのではないだろうかと思う。これまで沖縄は多くの面で受動的過ぎたし実際その体質が根強く残っている。今回のサミットで現実の沖縄が広く報道されウチナーのすばらしさも、人々の暖かさや豊かさも過去から繰り返される今の痛みと共に十分に発信された。そこで更にまた何か与えられる事を求めるのはあまりにも図々しい見苦しい。今こそ沖縄の自主性が、そして行動力が問われている事に気づかなければならないのである。地方でも大きな国家行事をやり遂げられた今回の事実の重みを、自信とプライドをに引換えて自らの未来を切り開いていく位の気構えがないと、今回携わった意味が半減する。サミットで損をした得をした等と近視眼的な発想を思い切りよく捨て去り、未来を見据えて大切な事を取捨選択し、自らが行動を起こすウチナーンチュ集団に変わることこそサミットの遺産にはならないだろうか。

《NEW ERA》

サミット後沖縄の観光はどう変わるのかという質問もよく受ける。けれど変化は後からついてくる現象であつて、どうしたいのかというビジョンこそが大切である。これは民間企業も行政も同時に考えるべき事で、サミットついたらいで多くの国際会議がいきなり獲得できる訳ではないし、人の記憶は頼りないもので、サミットが沖縄であつた事すら放つておくと思わされてしまう。沖縄独自のマーケティングプランの立案と、地道な営業努力、そしてそれをこなすスペシャリストの育成が急務である。幸いにも先に沖縄開発庁においてゲストサミットの件で検討が重ねられ、沖縄県も国際会議誘致の体制を整備しつつある。今大切なのは官民一体となり、「コンベンションビジネス」という新しい観光業のベクトルを本来あるべき方向と、お互いが望む方向に調整して共にスタートすることではないだろうか。官サイドでどんなにすばらしいスキームが出来たとしても、民間の意思が取りこまれていなければ意味がない。「笛吹けど踊らず」にならないよう、できれば初期の段階から其々でスタッフを出し合い、タスクフォースを結成する方向で考えてみてはどうだろうか。コンベンションビジネスが観光業の二つの柱にな

るまで十年は費やすであらう。しかしその種は時かれ実になるかどうかは私達の手に委ねられているのである。一方これまで課題とされてきた観光の量から質への転換は「コンベンションビジネス」の確立によって一挙に解決できるものではない。一般観光客に対する更なる新商品の開発や、観光商品としての沖縄のライバルである海外リゾートの深い研究検証など、魅力ある商品作りへの二層の努力が必要であらう。そして最後に米国のシリコンバレーのように産業と教育のリンクに発展があることも見逃してはならない。基幹産業である観光を教育機関の設立整備と合わせて再考する事や、未来を担う世代に沖縄の可能性と夢と誇りを堂々と実績をもって語り継ぎ、新しい沖縄の扉を開ける事も私達の大きな課題として今ここにある。

